

# 教育実習における訪問指導の事例研究

齋 藤 義 雄

東海学院大学人間関係学部子ども発達学科

キーワード：幼稚園、小学校、教育実習、訪問指導

## 1. 問題の所在

平成 27 年度の幼稚園および小学校の教育実習が終了した。本学に来て初めての实習であり、どのように行つてよいかわからなかった。実習に当たっては、共通理解を図るための教員用の指導の手引きが配布される。それは、各実習担当者から配布され、基本的には、それにしたがって実施すれば訪問指導が一通りできるように作成されている。しかし、訪問指導の成果をあげるためには、基本的な教員用の指導の手引き以外にも重要なことが少なくない。それは、文章としては明記されておらず、それぞれの教員が経験した暗黙知として蓄積されていることが多い。その暗黙知は、共有化されていないことが少なくないのが実態である。

## 2. 研究の目的

今回、幼稚園および小学校の教育実習の訪問指導を行いたいいくつかの実践事例に限られてではあるが、成果や問題点を明らかにすることにより、実践経験から得た暗黙知を文章化して、形式知へと近づけたいと考えた。文章化することで、同じ失敗を未然に防ぐことができる場合も多々あると思われるとともに、成功事例が多少でもあるとすれば参考にしてもらうことを目的とする。

## 3. 研究の方法

平成 27 年度に実際に訪問指導を行った経験から、指導の手引きには書かれていなかった事柄を整理し、文章化を試みることにし、形式知として一般化を図るものとする。また、実習する幼稚園や小学校が遠方のために訪問指導が実施できなかった事例に関しても比較のために分析を行った。

状況を詳しく分析するとともに、工夫・改善の足跡をできるだけ克明に記したい。

## 4. 教育課程経営の理論の整理

教育実習の訪問指導の理論は、教育課程経営の理論で説明できる。

教育課程経営は、P－D－S マネジメントサイクル(以下 P－D－S は省略して PDS と表記する) で運用されている<sup>1)</sup>。基本的には PDS マネジメントサイクルである<sup>2)</sup>。しかしながら、文部科学省は PDS マネジメントサイクルの評価を強調した PDCA マネジメントサイクルを採用している。PDS マネジメントサイクルの評価(See)を、評価(Check)、改善(Action)として、改善を強調している。教育課程経営をカリキュラムマネジメントとする立場がある。カリキュラムマネジメントでは4段階のPDSI マネジメントサイクルをとる<sup>3)</sup>。I は、改善のImprovementの頭文字であり、PDCAの改善のAと同じ意味である。カリキュラムマネジメントでは4段階のPDSI サイクルやPDCA サイクルを採用することが多い<sup>4)</sup>。4段階のマネジメントサイクルでは、文部科学省のPDCA マネジメントサイクルが広く普及している。3段階のPDS マネジメントサイクルには、評価したら改善して、新たな計画に生かすという意味が含まれているので、実は、PDCA マネジメントサイクルとする意味はほとんどない。意味があるとすれば、PDS マネジメントサイクルには、改善の段階がないので、改善しなくてよいと誤解される危惧である。その点では、PDCA サイクルには、改善の段階が含まれるので、誤解を招く懸念が少ない。結局重要なのは、評価を活かして実際に改善にどう結び付けるかである。

本論では、最も基本的な PDS マネジメントサイクルを採用する。また、教育課程はカリキュラムの訳語であり、マネジメントは経営の訳語であるから、カリキュラムマネジメントの訳語は、教育課程経営であると考えられる。この2つに別の意味を持たせる立場があり、本論では教育課程経営の立場をとる。

教育実習の成果をあげるためには、ねらいに即した目

標管理による教育課程経営の PDS が重要になる<sup>5)</sup>。

教育実習の訪問指導は、教育課程経営の PDS の観点から見れば、計画の P は、事前指導であり、実施の D が訪問指導であり、評価の S は、事後指導である。教育実習の成果をあげることが訪問指導の目標であり、目標管理の視点から実践事例を分析する。

本論では、PDS マネジメントサイクルの P（計画）の段階は、アポイントメントの留意点や事前指導であり、D（実施）の段階は、訪問指導の実際であり、S（評価）は、事後指導と改善である。

## 5. 事例研究

### 1) 幼稚園教育実習Ⅱ

岐阜県羽島市 A 幼稚園における A さんの教育実習を PDS マネジメントサイクルで分析する。

#### (1) P(計画)の段階

##### (ア) アポイントメントの留意点

幼稚園教育実習の指導の手引きには、訪問指導は実習期間の中間の期日あたりで実施するようになっていた。手引きにしたがって候補日を挙げ、幼稚園の行事等を考慮してもらい、日程調整を行った。部分実習を参観するようには定められていないので、予定に入れることはなかった。

##### (イ) 事前指導

4 年生の教職関係の授業では、教職関係は小学校を担当しているので、幼稚園を希望している A さんとは、事前指導が初対面だった。幼稚園教育実習Ⅰの成果を踏まえ、心構え等を話すとともに、実習の日程等の細部について事前に確認した。幼稚園教育実習Ⅰでも同じ幼稚園で実習を行ったことがわかり、具体的な指導事項は確認程度で済んだ。

#### (2) D(実施)の段階

##### (ア) 訪問指導の実際

訪問指導の報告書から引用する。なお、個人情報保護を配慮し、実名は避けイニシャルとした。(以下同様)

- ① 訪問日 平成 27 年 5 月 19 日  
10 時 30 分～12 時 00 分
- ② 施設名 羽島市 A 幼稚園
- ③ 幼稚園側と話し合いをした内容

- ・幼稚園教育実習Ⅰでも参加し、今回が 2 度目なので、きちんとしていて、慣れているようである。(T・S 園長)
- ・年少だった園児が、いまは年中になって、知っている子もいた。(Y・T 主任)
- ・機転が利いて、積極的にできている。
- ・岐阜聖徳学園大学からも実習に来ていて、指示待ちの実習生が多い中、自分からよく聞いてくれる。
- ・明日は、部分実習「びよんぴんがえる」(工作)を行う予定である。
- ・人前に出て行くのが苦手なタイプだが、声かけをよくやっている。
- ・がんばっている。(以上、H・N 先生)

#### ④ 学生の様子、学生からの話

- ・園児の中に入り、積極的に声かけを行っていた。
- ・園児が慕ってきて、周りに人の輪ができていた。
- ・英会話の時間でも、一緒に活動し、わからない園児に声かけを行っていた。
- ・先生の言葉かけについて学ぶことが多い。(A さん)
- ・年中組の「すみれ 3」で、前回の幼稚園教育実習Ⅰの年少さんと同じ子がいる。
- ・あと数日なので、大丈夫である。(A さん)
- ・園に対する要望は特になかった。(対談)
- ・部分実習を見に来られないが、頑張るように伝えた。
- ・あと数日なので、今までどおり声かけをして、頑張るように指導した。(齋藤)

#### ⑤ 感じたこと、今後の指導に生かしたいこと、就職情報など

- ・園長先生は、学生について具体的に把握していないので、主任の先生にお話をお伺いした。
- ・英語を週 1 時間ほど実施していて、岐阜市の小学校低学年(年間 18 時間)以上の時数であった。英会話についても、一緒に活動できていた。

#### (3) S(評価)の段階

##### (ア) 事後指導

後日、事後指導を行った。訪問指導以降の実習期間で何か問題はなかったか聞き取りを行った。部分実習の様子を詳しく聞き、成果と課題を確認した。また、今回の幼稚園教育実習で学んだこと、将来の進路に生かせることについて話を聞いた。

#### (4) 成果と課題

##### (ア) 成果

今回は、日程調整がうまくいき、参加実習を1時間ほど見ることができた。英語の時間であり、幼稚園でも小学校低学年とほぼ同じ内容を学んでいることが分かった。

##### (イ) 課題

事前にどのような教育が行われるのかは知らされていなかった。英語の時間に当たったのは偶然であった。幼稚園教育の専門家ならば、見たい領域もあったであろうから、幼稚園側に問い合わせることも考えたと思われる。しかし、何の領域であれ参加実習を見ることができれば、学生の様子が分かるものと考えていたために、事前に問い合わせることはなかった。幼稚園教育実習の集大成である部分実習を見ることができなかったのは、大きな課題である。

#### 2) 幼稚園教育実習Ⅱ

岐阜県岐阜市B幼稚園におけるBさんの教育実習をPDS マネジメントサイクルで分析する。

##### (1) P(計画)の段階

###### (ア) アポイントメントの留意点

実習期間の中央の期日あたりで実施するようにという、訪問指導の指導の手引きにあったので、それにしたがって候補日を挙げ、幼稚園の行事等を考慮してもらい、日程調整を行った。部分実習を参観するようには定められていないので、部分実習を参観する日程を組むことができなかった。

###### (イ) 事前指導

4年生の教職関係の授業には出ているが、教職関係は小学校を担当しているので、幼稚園を希望しているBさんとは、事前指導で初めて対面した。幼稚園教育実習Ⅰの成果を踏まえ、心構え等を話すとともに、実習の日程等の細部について事前に確認した。

##### (2) D(実施)の段階

###### (ア) 訪問指導の実際

訪問指導の報告書から以下のように引用する。

- ① 訪問日 平成27年6月5日  
13時30分～15時00分
- ② 施設名 岐阜市B幼稚園
- ③ 幼稚園側と話し合いをした内容

- ・幼稚園教育実習Ⅰでも参加し、今回が2度目なので、きちんとしていて、慣れているようである。(J・W園長)
  - ・はきはきしていて、先生に向いている。(T・S主任)
  - ・積極的に動いてくれている。子どもが泣いても、適切に対応してくれている。
  - ・明るく笑顔で、大きな声で接している。本当に幼稚園教諭に向いていると思う。
  - ・子どもとのスキンシップも図られていた。
  - ・紙芝居を突然お願いしても、上手にできた。
  - ・月曜日に部分実習があり、そこでピアノを弾く予定である。ピアノはあまり得意ではないと言っていた。
- (以上、S・M先生)

##### ④ 学生の様子、学生からの話

- ・幼稚園教育実習Ⅱは、教育実習の最後の実習となるので、楽しもうと思って取り組んでいる。
- ・園児の中に入り、抱っこも厭わず、というより自然にスキンシップを図りながら積極的に声かけを行っていた。(観察)
- ・泣いた園児や、怪我をした園児への対応がきびきびとして適切であった。
- ・剣道3段であり、声の大きさ、動きのよさはそこから来ていると思われた。
- ・月曜の部分実習でピアノを弾かなければならないのが当面の課題である。
- ・ピアノは大学で習っただけで、1年間のブランクがあり目下特訓中である。
- ・部分実習には来られないが、頑張るように伝えた。

##### ⑤ 感じたこと、今後の指導に生かしたいこと、就職情報など

- ・本人は、児童養護施設へ就職すると決めていると言っていた。
- ・幼稚園教諭に対する適性に優れ、このような学生ならどこに出しても恥ずかしくないと感じた。しかし、本人が言う通り、ピアノに自信がないために幼稚園教諭を断念したのであれば、まことに残念な話である。
- ・Bさんのように運動を中心に頑張ってきた学生が多い本学では、ピアノの技量の向上をはかる工夫があるとよいと感じた。大学2年生まで音楽をやるが、3年生のブランクが大きいようである。

- ・本学は、自由にピアノが使えるような環境整備がなされ、学生に告知されているので、ピアノが上達しなかったのは、基本的には本人の努力不足である。しかし、本人が強く意識しないと自主的に練習することは困難である面もある。
- ・教科器楽Ⅰ（１年生）・Ⅱ（２年生）・Ⅲ（４年生）に積極的に取り組ませることが重要になる。音楽科指導法（３年生）と関連させ、３年生でピアノの練習が中断し技量が落ちないように工夫させるなど、着実に技量が向上するように導くことが重要になる。

### （３）Ｓ（評価）の段階

#### （ア）事後指導

後日、事後指導を行った。訪問日以降の実習期間で何か問題はなかったか聞き取りを行った。部分実習の様子を詳しく聞き、成果と課題を確認した。また、今回の幼稚園教育実習で学んだこと、将来の進路に生かせることについて話を聞いた。

### （４）成果と課題

#### （ア）成果

大学の授業の関係で、園児が帰りの準備をしているところからの参観となったが、普段の園児の様子が分かったのよかったですと思われる。そのおかげで、ちょっとした怪我をした園児に対する学生の対応を見ることができた。想定外のことに咄嗟に対応できるかどうかは、その学生の資質や能力を知る上でも重要であり、その機会に恵まれたことになる。

前述のＡさんの事例では、教育の様子を参観できたことのよさが分かり、今回のＢさんの事例では、帰りの準備等の日常の様子が参観できたことのよさが分かった。

#### （イ）課題

訪問指導の手引きには、約１時間程度の参観となっているが、教育と日常の活動と合わせて１．５時間から２時間程度の参観が可能ならば、その分大きな成果が期待できると思われた。やはり、部分実習を参観できなかったことは、心残りであり、大きな課題である。

### ３）幼稚園教育実習Ⅰ

兵庫県高砂市Ｃ幼稚園のＣさんと岐阜県郡上市Ｄ幼稚園のＤさんの教育実習をＰＤＳマネジメントサイクルで分析を試みる。

### （１）Ｐ（計画）の段階

#### （ア）アポイントメントの留意点

訪問指導がないことによるデメリットは多い。幼稚園への電話でのあいさつは行ったが、一般的なお願いで終了してしまった。訪問指導の打合わせがないことにより、打合わせに具体性が少なかった。

#### （イ）事前指導

基本的には、学生から教員にアポイントメントを取って事前指導が行われる。訪問指導がないためか、学生からの事前指導のアポイントメントが遅れがちになった。訪問指導がないために、事前指導もいらないと誤解したり、意識が低くなったりしたためと思われる。教員側も、訪問指導がないため、当初は覚えていても、学生からのアポイントメントが遅れると、多忙な中で失念する可能性が高まってしまうことが危惧される。

### （２）Ｄ（実施）の段階

#### （ア）訪問指導の実際

今年度は学生の地元での教育実習だったために、学生の出身地が遠方であり、訪問指導は行われなかった。

実習期間等は以下の通りであった。

Ｃさん

① 実習期間 平成 27 年 9 月 7 日～9 月 18 日

② 施設名 兵庫県高砂市Ｃ幼稚園

Ｄさん

① 実習期間 平成 27 年 9 月 7 日～9 月 18 日

② 施設名 岐阜県郡上市Ｄ幼稚園

### （３）Ｓ（評価）の段階

#### （ア）事後指導

幼稚園への訪問指導を行っていないため、事後指導は難しい。学生からの反省や課題を聞くことにとどまった。指導された先生からの指導内容も反省の視点に加わっているが、あくまで主観的な感想や反省の域を出なかった。それに対して、教員が訪問指導を行っていないために、別の視点からの指導・助言を与えることができなかった。一般的な指導はできたものの、学生に応じたきめ細かな指導はなかなか難しかった。

### （４）成果と課題

#### （ア）成果

訪問指導がなかったことによる成果は認められなかった。



#### (イ) 課題

訪問指導は、大学側が学生に対する指導として必須であると思われる。どのような遠方であっても、訪問指導は欠かしてはならない。

遠方への出張が無理な場合、学生の地元の幼稚園で教育実習を行うという制度を改めなければならない。大学の近隣の幼稚園で実施することにより、訪問指導が確保されるのであれば、そのほうがよい。

CさんとDさんは、どちらも遠方のため、訪問指導ができなかった。PDSのDが存在しない状態であるから、PDSマネジメントサイクルは成立しなかった。訪問指導のD(実施)がないことにより、学生に対する指導・助言が一般的な内容にとどまり、個に応じた丁寧な指導はできなかった。教育実習の成果に、大きな課題を残した。

#### 4) 小学校教育実習

岐阜県下呂市立E小学校におけるEさんの教育実習をPDSマネジメントサイクルで分析する。

##### (1) P(計画)の段階

###### (ア) アポイントメントの留意点

教育実習の前日に、あいさつのために学校に電話をした。校長先生へのあいさつを希望したが、校長先生がその日は留守であり、教頭先生が対応してくれた。よろしくお願ひしますと、教頭先生にあいさつをし、校長先生にもよろしくと伝えてくれるようお願いした。訪問指導をするなら学生の授業を参観したい旨を伝えた。それならば研究授業がよいということになり、日程調整を学校側にお願いした。大学の授業との関係を考慮し、学校側に訪問が可能な日時を伝えた。研究授業を参観できることとなった。

AさんやBさんの事例の教訓を生かした結果、研究授業を見ることができると、それ以外に日常の様子も参観できるように、昼休み、清掃の時間、研究授業、休み時間と参観することにした。

###### (イ) 事前指導

3年生の教職関係の授業に出ているため、Eさんとは初対面ではなかったが、Eさんと直接話をするのはこの事前指導が初めてであった。教育実習で研究授業をするのであれば、「体育」が希望だという。担当者は研究授業の教科までは事前に調査しなかったようである。教育方法論等を担当しているので国語、算数、理科、社会等にはある程度対応できる。しかし、実技教科の体育の指導法には疎い。体育が専門の教員に分担してほしかったと

思ったのが本音であった。実際に本学科には体育の専門家が多いので、体育の研究授業ならば体育の担当者を分担する方法もあったのではないかと疑問が残った。

##### (2) D(実施)の段階

###### (ア) 訪問指導の実際

訪問指導の報告書から以下のように引用する。

- ① 訪問日 平成27年9月30日  
13時20分～15時20分
- ② 施設名 下呂市立E小学校
- ③ 小学校側と話し合い等をした内容

- ・運動会の準備の期間と重なった。本校職員の男女構成は極端に女性が多く、女性の教師がほとんどの中、男性の実習生が、自ら進んで力仕事をかけてくれたので本当にありがたかった。明るくて、まじめに取り組んでくれた。(A・T校長先生)
- ・研究授業の準備に忙しく、直接お話をする機会はなかったが、理科の授業の指導や実験の準備をしてくれたおかげで、実習生が問題なく授業を進めることができた。(Y・A教頭先生)
- ・研究授業の参観が中心で、直接お話しする機会がなかったが、実習生の記録等の指導を行ってくれた結果、問題なく実習を進めることができた。電話等での連絡の際は適切に対応してくれた。(教務主任N・F教諭)
- ・少ない男性教師の中で、先輩として実習生に親身になって指導してくれた。(児童指導主任K・K教諭)
- ・話をする機会はなかったが、学習訓練の指導が徹底されていて、実習生が指導しやすい学級経営を実践されていた。(5年1組担任T・Y教諭)
- ・理科の担当として、実習生の指導案立案等の相談に、親身になって携わってくれた。(5年2組担任Y・M教諭)

###### ④ 学生の様子、学生からの話

研究授業は、当初の予定とは違った理科で行われた。普段の授業では着ていなかった白衣姿だったので、児童も普段とは違うことが分かったようだった。

学級の先生や児童に恵まれ、楽しく実習ができたようだった。

三重県の皇學館大学の学生も一緒に実習を行っていた。本学と皇學館大学の教育実習の手引きの指導案の形式が違っており、皇學館の方が詳しくだったので、その様子を

参考にしたという。皇學館大学は教育学部であり、本学は子ども発達学科なので、教育学部の方が正しいと思ってそちらに従ったと言う。

学生の言葉は、本学の職員である私には、自尊心を傷つけられたような感情が芽生えたが、冷静に対応した。東海学院大学の実習の手引きの指導案の様式が古いわけではない。指導案の様式は多様であり、その1つにすぎないと伝えた。ただ、念のために項目等に関して更新されていない部分がないかどうか、大学に戻ったら確認してみたいと伝えた。学生に劣等感のような気持ちを抱かせてしまったとしたら、教員側にも課題が残されたということになる。劣等感のような気持ちを払拭させることは、教員にとっても最優先で取り組む課題である。

授業研究会に相当する内容は、本人から児童と接する時間を奪わないようと考え、要点を押さえて行った。

児童が基本的な学習習慣が身につけているため、児童指導的な面には全く問題なかった。声の大きさや板書の文字などの基本的な部分には問題はなかった。また、学生なので、不慣れな部分はあるものであり、指導した内容も不慣れなことが要因である範囲に収まった。経験を積みれば解消できるものばかりであった。

#### ⑤ 感じたこと、今後の指導に生かしたいこと、就職情報など

学生の母校であるため、学生に関して共感的な理解をしてくれているのは、ありがたいことであった。文部科学省が懸念しているように、評価の段階で甘くなる心配がないわけではないが、学生を温かく迎えてくれる雰囲気は、何物にもかえがたいと感じた。特に、学生が教職に対して抱く印象には大きなプラスとなり、進路の実現に向けて気持ちが前向きに働くと思われる。それはまさに一種のピグマリオン効果であり、出身校が一概にはいけないとは言えないと強く感じた。

### (3) S(評価)の段階

#### (ア) 事後指導

教育実習期間は、児童とのふれあいを重視して、研究授業のくわしい授業研究会は事後指導の場で行った。学生が印象に残っているうちに実施するのが望ましいと考え、できるだけ早い時期での実施を心がけた。参観した研究授業に関することを中心に指導を行った。

### (4) 成果と課題

#### (ア) 成果

母校実習ではあったが、在校した当時に教えてもらった教師が残っているわけではないので、公平性は確保されていた。教師は変わっても、母校での実習に関して、実習生として頑張ろうという学生の意識の高揚が見られた。母校実習のメリットであると思われる。大学の近隣での実習となった場合に、学生のこの使命感のような感情は、母校実習に比べて低いものになってしまうと思われる。

女性の教師が多いという小学校の男女構成を考えると、男性の学生が参加することの意味は大きい。特に今回は、運動会の練習・準備・運動会の本番という時期だったので、男性の学生の存在が、学校にとってもとても助かったようであった。このような顕著な時期でなくても、若い男性の学生が参加することによって、児童や教師に与える影響は少なくない。いい刺激となるならば、学生が実習を行ったことが、小学校側にもメリットがあったことになる。小学校側にかかる負担の方が大きいとは思われるが、多少なりとも還元できれば、小学校側のメリットも少なくないと考えられる。

附属小学校を持たない本学科にとって、教育実習を受け入れてくれたことには、感謝するほかはない。公立の小学校での様子を参観できるということは、教育学を研究する大学教員にとっては現場との貴重な接点となる。ましてや、附属小学校ではないので、多様な学校を参観することができる機会となり、一般的な小学校の実態を正しく理解することの一助となる。

#### (イ) 課題

母校実習のデメリットは時間的な問題である。母校実習の場合、学生の実家から近隣の小学校での実習となるが、大学の近隣ではない。学生の実習校までの移動のために多くの時間を要する。今回は、研究授業の参観とその授業研究に要した時間よりも、移動の時間の方が長く、非効率であった。

### 5) 小学校教育実習

沖縄県南城市F小学校のFさんの教育実習をPDSマネジメントサイクルで分析を試みる。

#### (1) P(計画)の段階

##### (ア) アポイントメントの留意点

小学校への電話でのあいさつは行ったが、一般的なお願いで終始してしまった。訪問指導の打合わせがないこ

とにより、打合わせの内容が乏しく、形式的にならざるを得なかった。

前回の幼稚園教育実習で部分実習が参観できなかったという反省を生かし、校長先生に研究授業の録画をお願いした。DVDなどを事前に用意してのお願いではなかったので、できればということをお願いしたのであり、必ず録画してくださいというように強く言うことはできなかった。

#### (イ) 事前指導

基本的には、学生から教員にアポイントメントを取って事前指導が行われる。訪問指導がないが、きちんとした学生であり、事前指導のアポイントメントは遅れなかった。Eさんの訪問指導を実施するので、一緒に指導することにしたため、訪問指導があるEさんのよい影響を受けたと思われる。

教員側は、Fさんの訪問指導はないが、Eさんの訪問指導があったため、具体的な指導が可能となった。

### (2) D(実施)の段階

#### (ア) 訪問指導の実際

今年度は原則的に学生の地元での教育実習のために、学生の出身地が遠方であり、訪問指導は行われなかった。実習期間は以下の通りであった。

Fさん

①実習期間 平成27年9月1日～9月30日

②施設名 沖縄県南城市F小学校

### (3) S(評価)の段階

#### (ア) 事後指導

小学校への訪問指導を行っていないが、前回の幼稚園教育実習の事後指導の反省を踏まえ、同時期に実習を行ったEさんといっしょに指導することにした。

Fさん一人であつたら、学生からの反省や課題を聞くことにとどまったと思われる。しかし、訪問指導を行ったEさんの具体的な話と比較させることで、Fさんに関してもある程度具体的な指導・助言を行うことができた。

訪問指導に参加できない場合、教員が指導する複数の学生のうち、誰か一人でも訪問指導を行っていれば、訪問した学生と比較させる手法により、指導内容を充実させることができることがわかった。

幼稚園教育実習Ⅱでは、担当の2名とも訪問指導がなかったので、最も悪い事例になってしまったと思われる。その点、今回の小学校の教育実習では、訪問指導ができなかった学生に関しても、訪問指導を行った学生に近い

指導・助言が可能となった。

### (4) 成果と課題

#### (ア) 成果

Fさんの訪問指導はなかったが、同時期に実施したEさんといっしょに指導したことにより、Eさんへの具体的な指導を聞くことができた。Eさんとの共通点や相違点を述べることで、自分の体験を話すことができ、一定の指導の成果が認められた。

#### (イ) 課題

訪問指導は、大学側が学生に対する指導として必須であると思われる。どのような遠方であっても、訪問指導は欠かしてはならない。

遠方への出張が無理な場合、学生の地元の小学校で実習を行うという制度に改めなければならない。大学の近隣の小学校で実施することにより、訪問指導が確保される。

Eさんの訪問指導はできたが、Fさんは遠方のため、訪問指導ができなかった。PDSのDが存在しない状態であるから、PDSマネジメントサイクルは成立しなかった。訪問指導のD(実施)がないことになり、本来ならば、学生に対する指導・助言が一般的な内容に留まり、個に応じた指導はできない状況であった。

しかし、訪問指導を行ったEさんといっしょに指導するように工夫したことにより、訪問指導の疑似体験をしたような状況にすることができた。

教員側の疑似体験として、録画による研究授業の参観が考えられる。今回は、訪問指導ができないデメリットを少しでも減らすため、研究授業の録画を小学校にお願いした。録画を参考に、事後指導ができるものと考えたからである。しかし、学生が言うには、当日担当の教頭先生がすっかり忘れたという。そのために、今回は研究授業の映像を参考にはできなかった。もし映像があれば、かなりの指導ができたものと思われる。訪問指導が難しい場合には、有効な方法であると思われる。

しかし、それでもFさんに対して個に応じた適切な指導が出来たかと問われると、大きな疑問が残る。

やはり、教育実習における訪問指導は、不可欠であると思われる。

## 6 成果と課題

### 1) 成果

お世話になる幼稚園や小学校へのあいさつを重視する場合は、大学の代表として実習の初日や2日目等の初期

に訪問することになる。学生の様子を観察し、指導を重視する場合は、幼稚園における観察実習や小学校における授業を参観している初期ではなく、実際に学生が主体で活動している参加実習や授業を行っている中盤から終盤の訪問となる。訪問指導の趣旨を考えると、学生が主役である中盤から終盤が妥当である。

小学校では、教育実習を参観することができ、学生が精一杯考えた指導案に基づく授業に関して指導ができたので、訪問指導の成果をあげることができた。

幼稚園や小学校へのあいさつは、事前に電話で済ませることができる。中盤や終盤の時期の訪問指導のときに改めてあいさつしたとしても、特段失礼には当たらないと思われる。

本学の手引きでは、小学校では研究授業を見るために終盤の訪問である。一方、幼稚園では、学生が行う実習を参観するが、中間くらいの期間に訪問することになっている。参加実習は見ることができが部分実習は見ることができない場合が多い。

#### ① 学生にとって

幼稚園における学生の教育の様子や小学校の授業を参観するならば、普段の参加実習や授業でもある程度はわかるが、部分実習や研究授業を参観することが一番である。それは、学生自身が全力で計画し、実施する部分実習や研究授業は、その学生の現在の力量を適切に知ることができるからである。

また、学生様の確認や困ったことが途中で発生した場合の相談は、学生と電話で話すことによっても確認したり解消したりすることができる。幼稚園や小学校への要望があれば、電話で連絡を取り合ってわかった時点で校長先生や教育実習担当者（主に教務主任）に伝えることもできる。したがって、終盤の訪問によるデメリットは軽減できると考えられる。

研究授業の参観では、大学の普段の学生の様子とは違い、成長した学生の姿を見ることができた。それは、4週間小学校で指導していただいたことに加え、きちんとした指導案が存在し、それに基づき授業が行われた点によるものと思われる。

学生の普段の様子が分かるのは普段の授業であり、幼稚園の場合は、部分実習と参加実習との差は、比較的少ない。まず、幼稚園児は、普段の参加実習も部分実習もあまり区別なく活動している。学生も、それに対応することになるので、学生の活動自体の差も比較的少ない。一方、小学校の授業では、普段の授業に比べ、研究授業では児童の意識が全く異なる。緊張して発言できなくな

る児童もいるが、大部分は実習生である学生のために、張り切って授業に臨む。児童の力が最大限に発揮される。児童指導上の問題が少なく済むことにより、研究授業の方が、指導法の問題の本質に迫れるので、大学教員にとっては参考になる。

学生が略案で行う普段の授業と、きちんとした指導案で行う研究授業では大きな差がある。学生は、経験が少なく、略案での授業で経験を積んでいく。この段階で大学教員が指導しても、成長過程での指導となり、未熟さや不慣れに対する指導という一面が強く、その学生が持っている力量への適切な助言といえるかは疑問が残る。研究授業は、実習期間という限定的な期間という条件下ではあるが、学生が全力で取り組んだ姿を見ることができ、教育実習の成果を確認できる。学生にとっても大学教員に見てもらうに値する内容であると確信がもて、それに対する指導・助言は、大いに勉強になると思われる。

したがって、基本的には部分実習や研究授業を参観することがよいと思われる。

#### ② 幼稚園や小学校にとって

部分実習や研究授業は、学生の力量が反映し、担当教師の指導・助言を受けて行われる。教育実習の集大成と言っても過言ではない。大学教員が実習期間に1度だけ指導・助言するならば、部分実習や研究授業が一番ふさわしいと述べた。大学教員が、幼稚園や小学校の担当教師と違った視点から指導・助言ができれば、学生の参考になる。また、大学教員の指導・助言が、実習生を通して幼稚園や小学校の担当教師に伝えられることで、幼稚園や小学校教師の参考になる。大学教員の違った視点は参考になるであろうし、同じ視点であったとしたら、幼稚園や小学校の担当教師の指導の妥当性が高まったと受け止めてもらえる可能性があり、幼稚園側や小学校側にもメリットがある。

幼稚園や小学校との接点ができたことで、社会との連携の素地ができたことと捉えることができる。本学には、幼稚園の全領域や小学校の全教科、道徳、特別活動、外国語活動、総合的な学習の時間を担当する教員がいる。児童指導に関連して、心理学関係の教員や、特別支援に関する教員もいる。校内研修等で、本学の教員を活用してもらうという視点も重要である。もし、幼稚園や小学校側にニーズがあるのであれば、大学側は積極的にPRすることが重要となる。このニーズに関しては、必ずあると考える。それは、幼稚園や小学校の研修等に指導主事を派遣してもらうことは、日常的に行われているからである。指導主事よりも専門性が高い大学教員の指導が可

能になれば、研修の成果がさらに上がると考えられる。

大学教員の派遣要請は、敷居が高いと捉えられている可能性は高い。しかし、派遣してもらう手立てや手順がわからないことも要因の一つと考えられる。さらに、謝礼等の具体的な予算がどれだけかかるかわからないことも大きな要因であろう。指導主事は、研修のための役割の仕事なので無料である。大学教員を招聘するには、予算がないと考えるのも現実であろう。

これらの点に応えられるような体制を整え、地域に貢献することも本学がこれから考えねばならないことであると思われる。

### ③ 大学にとって

部分実習や研究授業を参観し、それに対する学生への指導をすることで、学生から間接的に担当教師に大学教員の意見が伝わる可能性がある。大学教員は、現場の教師に対して恥ずかしくないような指導・助言を与える必要があり、大学教員にとっても勉強になる。

学生への事後指導において、幼稚園や小学校でどのように指導されたかを聞くことも重要である。自分が指導した内容と、現場の教師の指導とを比較・検討することは、大学教員の勉強になる。自分が見えなかった視点からの指摘があれば、次回から自分の視点として設定することができる。現場の教師の視点は、それまでの経験と校内研修や教育委員会等の外部研修で培われた視点であり、大学教員も理解しておく価値がある。教育現場の教師は、大学教員は理論だけで実践には役に立たないと考えている傾向があり、その認識を払拭するためにも、教育現場を知ることは大学教員にとって重要なことである。

### ④ 教育課程経営の立場から

PDS マネジメントサイクルが機能するためには、各段階が存在することが最低条件である。訪問指導を行った場合は、教育実習に関する指導・助言が行われ、教育実習のPDS マネジメントサイクルが機能する。訪問指導が行われない場合は、大学教員の指導・助言が現実に基づくものとならず、PDS マネジメントサイクルが機能しない。

## 2) 課題

### ① 学生にとって

#### (ア) 訪問の時期

本学では、小学校では研究授業を見るために終盤の訪問である。幼稚園では、実習期間の中間くらいの期間に行くことになっており、学生が行う参加実習を参観する

ことが多い。部分実習の時期である終盤が妥当であると思われる。

問題は、研究授業は実習期間の終盤に実施されるので、大学教員のアドバイスを生かす場が少なくなってしまうということである。

#### (イ) 訪問の回数

訪問指導を部分実習や研究授業の時に実施するという問題は、訪問指導を1回しか訪問しないために生じる問題であり、2回、3回と訪問指導が可能ならば解消することができる。

来年度から各務原市を中心とした大学の近隣での教育実習となる。移動時間が大幅に短縮されるので、学生と関わる時間が多くとれることはメリットである。大学の近隣で実施するので、今までのような1回の研究授業の参観に終わらせず、もっと多くの接点を持つことが可能になる。

その場合は、部分実習や研究授業のほかに、参加実習や普段の略案で実施する授業も参観したい。学生の技量が発展途上の段階で指導・助言することは、前述のように経験不足による未熟さに対する指導になる面が多いが、部分実習や研究授業までに成長してもらうためには、必要なことである。部分実習や研究授業が実習期間の4週目に実施されるとすれば、3週目にも訪問指導を行うのである。3週目に指導して指摘した部分が、4週目に改善されていれば、訪問指導をした成果と言える。

できれば、4週間のうちに毎週1回の4回の訪問指導が可能であれば、手厚い指導となる。

1週目は、幼稚園や小学校へのあいさつを兼ねて初日か2日目として、教育実習全般に関して、学校側とも綿密な打ち合わせを行いたい。2週目は、2週目の後半に訪問し、実際に学生が自ら参加実習や授業をするにあたっての細かな指導を行いたい。3週目、4週目に関しては、前述のとおりである。

大学教員が折に触れて学生を指導することによって、実習生は現場の指導教師の見方と大学教員の見方が異なれば、多様な見方ができるようになり勉強になる。もし、同じであれば、その内容の妥当性を確信することができる。両者から褒められれば自信につながるであろうし、両者から改善点を指摘されれば、素直に受け入れることができるであろう。

#### (ウ) 訪問者の決定

小学校の教育実習において、学生が、担当する大学教員の専門以外の教科について研究授業を行った場合に、

適切な指導・助言ができるかは疑問が残る。

本学の子ども発達学科での担当教員の決定は、教育実習担当者によって行われている。事前に、専門教科を聞かれたわけではない。住居のある場所から実習を担当する小学校までの距離や移動のための交通手段等はある程度配慮されている。また、男女も配慮される場合もある。しかし、担当教科は、ほとんど考慮されていない。

今回の事例では研究授業は理科で行われ、担当の大学教員は理科の専門家ではなかった。専門的な指導・助言を与えることができなかったという反省点がある。

ただ、授業中の指示の明確さや個に応じた指導が行われていたかなどの指導は可能だった。それは、大学教員が小学校での指導経験があったことが大きい。専門の教科でなくとも小学校教師は、学級担任制で基本的には全教科を教える。小学校での指導経験があることにより、専門の教科でなくても教師の視点から指導・助言が可能であった。大学教員が小学校教師の経験があるかどうかは、担当者を決める場合の大きな判断基準となる。経験者であれば、専門の担当者を配置できない場合でも、ある程度の実践的な指導・助言が可能である。

学生に対しては、事前調査を行って、研究授業の実施予定教科を調べているわけではない。したがって、実施予定の教科を考慮して担当教員が決められているわけではない。研究授業を参観し指導する場合、その教科を専門とする教員が訪問指導を行ったほうが効果をより高めることができることは明らかである。教育実習の具体的な担当教員を割り振る場合、学生が何の教科で研究授業をする予定であるのかを事前に調査し、学生の希望教科に応じて、できるだけ専門の教員がその学生を担当するように配慮することが重要である。

本学の訪問指導の担当教員は、教員の負担が偏らないように均等に割り当てられているが、今後は見直しが必要である。たとえば、音楽の研究授業を行う予定の学生には、音楽の専門教員が行くことが望ましいし、体育の研究授業を行う予定の学生には、体育の専門教員が行くことが望ましい。本学科が、音楽コースやスポーツコース、心理コースに分けられるので、教育実習担当者もコース別に決められることが理想的である。

本学の教員には、教科に属さない教員もいる。道徳や特別活動、総合的な学習の時間等を担当する教員である。小学校の教育実習の研究授業で、このように教科以外が行われる場合は少ない。主に、国語、算数、理科、社会、音楽、図工、体育、家庭科、生活科、外国語活動等の教科が教科に準ずるものを中心となる。

できるだけ教科の指導教員を当てるという原則で担当

者を決めても、専門教科以外の担当者の手を借りなければならぬのが現実である。その場合でも、文系教科や理系教科、実技教科等を配慮し、できるだけ専門分野に近い教員や教職経験者を担当者とする。

しかし、教科を配慮して担当者を決定したとしても、実際には、予定の教科と違う教科で研究授業を行う場合も少なくないので、必ずしも担当教科を配慮することが意味を持たなくなることがある。その場合は、担当教員がそのまま研究授業を参観することになるが、この状況は現状と同じなので、現状維持ということになる。予定通りの教科を実施した場合は、専門的な指導を受けることができるので、全体的に考えれば現状よりは改善されることになる。学生にとって、より専門的な指導が受けられるような条件整備をすることが重要である。

## ② 幼稚園や小学校にとって

来年度から教育実習は、各務原市や大学の近隣の幼稚園や小学校を中心に行われることになる。幼稚園や小学校にとってもメリットがあるようにしなければ、継続的に教育実習をお願いすることは難しくなる。

提案として、幼稚園や小学校が取り組んでいる研究課題や研究のテーマに応じた大学教員を担当者として配置することである。

前述した教育実習の研究授業に関連した教科担当者の視点に加え、たとえば、児童指導に力を入れている学校には、心理学系の教員を配置したり、個に応じた指導に力を入れている場合は、特別支援教育の教員を配置したりということである。

担当者が実習校を大学教員に割り振っているが、学生の研究授業の教科とは別の視点を加えるという見直しも考えられる。

各幼稚園や小学校から、研究課題やテーマを教えてもらおうと同時に、教員側の希望を聞くステップが必要となる。あるいは、教員の専門分野や研究テーマの情報を幼稚園や小学校に伝え、希望する教員を指名してもらう方法もある。

また、教育委員会から一方的に割り振られてしまった場合、教員の研究分野に合致した学校がリストからはずされてしまう可能性もある。可能であれば、大学教員から逆使指名ができるシステムになると、研究する視点からはありがたい。距離などの理由から教育委員会に機械的に割り振られてしまうより、大学教員の専門や研究テーマに近い学校と連携したほうが、幼稚園や小学校にとってもメリットは大きいはずである。

### ③ 大学にとって

教育実習期間に関係なく、学校の校内研修にも参加し、適切な指導・助言を与える。そのことにより、現場の教師にも勉強になる。大学教員にとってもメリットがある。附属小学校を持たない本学の教員にとって、現場と連携した実践的な研究が可能になることにはメリットが大きい。学校と大学教員の双方にメリットがあるウイン・ウインの関係を構築することで、学生の教育実習を継続して受け入れてもらえる条件整備を図ることができる。

### ④ 教育課程経営の立場から

PDS マネジメントサイクルが機能する最低条件は、各段階が存在することである。教育実習の訪問指導が行われなかった場合は、大学教員の指導・助言が現実に基づくものとならず、PDS マネジメントサイクルが機能しない。

訪問指導が実施されることが、学生にとっては必須であり、訪問指導の実施が何よりも優先されねばならない。

したがって、遠距離であること等の理由から訪問指導がなされないことは、何としても避けるべきである。大学教員による訪問指導ができる大学近隣での教育実習の実施が妥当である。

最後に、蛇足ながら、大学教員の訪問指導の質について指摘しなければならない。今まで大学から遠方の場合、大学教員の訪問指導なしで教育実習が行われてきた事例は少なくない。それらの教育実習では、幼稚園や小学校できちんと指導され、一定の成果をあげてきたことも事実である。大学教員の訪問指導が、形式的で実践に役に立たないのであるならば、訪問指導そのものがいらなくなってしまう。まさに、大学教員による訪問指導の質の向上が問われることになる。

### 参考文献

- 1) 高野桂一「学校経営の諸領域と研究方法」『学校経営』協同出版 1982年 p74
- 2) 中留武昭「教育課程経営の実践モデルの考え方」高野桂一『教育課程経営の理論と実際―新教育課程基準をふまえて―』教育開発研究所 1989年 p100
- 3) 中留武昭・田村知子『カリキュラムマネジメントが学校を変える』学事出版 2004年 p11
- 4) 天笠茂「カリキュラムマネジメント」『カリキュラムを基盤とする学校経営』ぎょうせい 2013年 p24
- 5) 小泉祥一「目標管理による教育課程経営のPDS」前掲書2) pp244-257
- 6) 長尾彰夫「教育課程の評価をどう活かしていくか」『教職研修』教育開発研究所 2003年 pp50-53

— 2015.7.24 受稿、2015.11.26 受理 —